もう一度考えたい「ゆとり教育」の意義

髙 木　雅 晴

1　テーマについての考察

年度当初は「少人数指導」をテーマに決め活動報告の作成を考えていましたが,この１年、学校から聞こえてくる声をきいていると、「生きる力」について改めて考えるべきではないかと思い、テーマを変更しました。　今年度は小学校で、来年度は中学校で学習指導要領が完全実施されます。この改定によって大きく変わったことの一つとして、評価観点が４観点からすべての教科共通の３観点になったことが挙げられます。

その手立てとして県教委では、児童生徒に育成すべき資質･能力を育むために『「思考し、表現する力」を高める実践プログラム』の内容に「主体的・対話的で深い学び」実現に向けた授業改善が示されました。

先生方からは、３観点の評価はどのようにしたらよいのか。今までの評価の仕方と何が違うのか。「主体的・対話的で深い学び」とはどんな学びのことをいうのかなど、国や県で表記された言葉を整えるためにはどうしたらよいかに悩んでいる気がします。本来、子どもたちに身に付けさせるべき本質(生きる力)とは何なのかを改めて考えたいと思います。

2　「生きる力」について改めて考える

今回の指導要領も「生きる力」を育成することが柱であり、総則にも『学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であることを改めてとらえ直し（以下省略)』と記されています。長年その育成を目指してきたといいますが「生きる力」はいつの学習指導要領から示されたのでしょう。約 20 年前の 1998 年 12 月に告示された学習指導要領が最初になります。その 1996 年答申では次のように示されました。

教育課程審議会答申は、21 世紀を展望し、「ゆとり」の中で「生きる力（いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し行動し、よりよく問題を解決する資質・能力，自らを律しつつ、他人と共に強調し他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性，たくましく生きるための健康や体力)」を育むことをキーワードに「完全学校週 5 日制」の導入を提言し、指導内容の厳選を求めた。

＜教課審答申のポイント＞

1 豊かな人間性や社会性，国際社会に生きる日本人としての自覚の育成の重視
2 多くの智識を一方的に教え込む教育を転換し、子どもたちの自ら学び自ら考える力の育成
3 ゆとりある教育活動を展開し、基礎・基本の確実な定着をし個性を生かす教育を充実
4 各学校が創意工夫を生かし特色ある教育特色ある学校づくりを進めること

３「生きる力」と「総合的な学習の時間」の目標から見た共通点

○1998 年 12 月告示の小学校学習指導要領「総合的な学習の時間」の目標では

(1)自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。

(2)学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的・創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えるようにすること。

(3)各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること。

○2017 年 7 月告示の小学校学習指導要領「総合的な学習の時間」の目標では

「探究的な見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，よりよく課題を解決し，自己の生き方を考えていくための資質・能力」の育成を目指す。

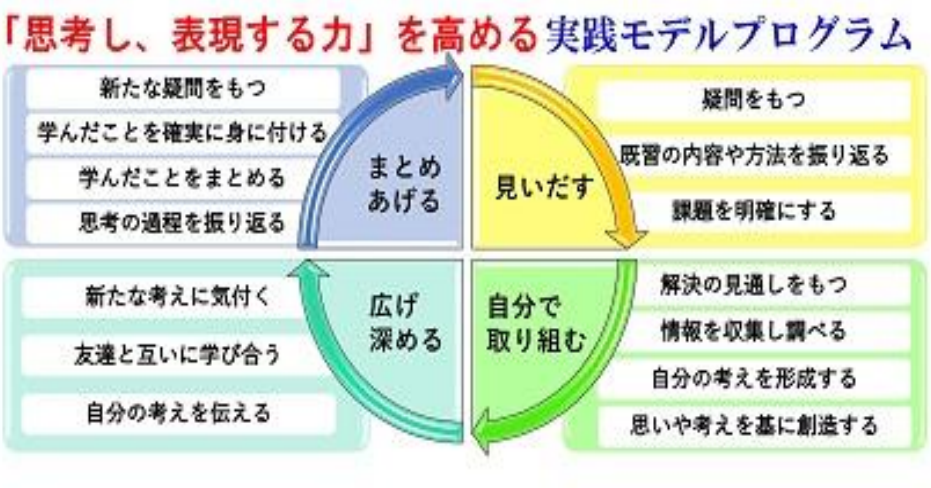
(1)探究的な学習の過程において課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。

(2)実社会や実生活の中から問いを見出し自分で課題を立て情報を集め整理分析して、まとめ・表現することができるようにする。

(3)探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

４　本来の「ゆとり教育」の意義を見直す必要性

先の中教審答申の資料でも示したように「生きる力」の育成を目指し「教育内容の厳選」「学校裁量による『総合的な学習の時間』の創設」「完全週 5 日制の導入」の３本を柱とする大きな教育改革が約２０年前に行われました。しかし、この指導要領は、告示直後から子どもたちにのんびりと学校生活を送らせるもの、子供たちの学力を低下させるもの、指導内容を削減し教師の負担を軽くするものと批判されました。「ゆとり教育」本来の意味は「時間的・精神的にゆとりのある教育」であり、それは教師が教え、子どもたちがそれを覚えるというこれまでの教育の基調を転換するものなのです。つまり、この２０年来求めている教育とは教師が時間をかけて創意工夫し様々な指導法を駆使して丁寧でわかりやすい指導を行うとともに、授業の中で子どもたちが自ら考え調べる学習、体験的な学習、問題解決的な学習などに取り組める時間を確保し，子どもたちが基礎・基本から知識を確実に習得しながら思考力・判断力・表現力等をしっかり育む教育なのです。

５　これからの教育に向けての提言

コロナ禍の今だからこそ、働き方改革を求められている時期だからこそ、まずは子どもたちにどんな力をつけさせるのかを教科や領域といった狭い範囲で考えるのではなく教科領域、や教育課程全てを横断的にとらえ「生きる力」を育ませていくことが、持続可能な社会の作り手を育む教育につながるのではないでしょうか。そんな視点で見ると、県教委が示した「実践モデルプログラム」の必要性もよく理解できるのではないでしょうか。